

日本文学作品のクオリアを記述する試み
—質的変数を数量化する

平澤 洋一

A Trial on Documenting Qualia of Japanese Literatures
—Measurement Based on Qualitative Variable

abstract :

Qualia is widely used as a meaning of “sensation”, “quality” or other similar expressions. In contrast, this paper studies qualia as the concept of “quality” in semantics which is described by both quantitative and qualitative variables. Measurements on qualia have been challenged for more than twenty years, researches and data analysis on qualia from Japan’s oldest historical records *Kojiki* to modern works appear to be organized methodically. As an example, this paper discusses the qualitative variables of “Snow” in *The Tale of Genji* and *The Pillow Book*.

keyword :

qualia, measurement, qualitative variable, Japanese Literatures, snow

Yoichi HIRASAWA

1 はじめに

クオリアは「感覚質」「質感」ないしはそれに近い意味で使われることが多いが、本論文では量的変数＋質的変数で構成される意味論上の概念としての「質感」として扱う。クオリアに関しては、同一説、機能主義、消去主義、志向説（表象説）、再帰的一元論など、さまざまな学説が展開されてきた¹⁾が、どの説をとろうとも、ディズニー映画の白雪姫の食べたリンゴ（赤と白が半分ずつ）とニュートン万有引力のリンゴとの質感の違いを明らかにすることはできそうもない。そこで、発想を変え、変数を通時的に調査・分析していく帰納法的な研究方法をとることにした。

2 調査方法-1

『雪月花のクオリア』²⁾では『古事記』『万葉集』『源氏物語』『枕草子』を調査し、それらの作品に見られた全用例の構成成分をクオリアの小さな変数ごとに数字で表すことを試みた。映像で茂木健一郎氏が感じたクオリア²⁾が数値化できるのなら、文字作品でもそれが可能に違いないと感じたのが調査のきっかけであった。

本研究では、クオリアの数値化を『古事記』から現代までの文字作品の通時的な調査を進めつつある。本稿では『源氏物語』と『枕草子』にあらわれた「雨」と「雪」のクオリアの違いに焦点を当てながら検討していく。

『源氏物語』には「あはれ」が79回、「をかし」が81回、『枕草子』には「あはれ」は36回、「をかし」は132回出てくるので、「あはれ」と「をかし」だけで二つの作品を特徴づけるのは適切ではない。言うまでもなく、二つの作品には物語と随筆という描写の目的や視点の根本的な違いもある。『源氏物語』ではクオリアが作中人物や自然描写の中に溶け込んでいるのに対し、『枕草子』ではあくまで客観的な描写に終始していることが多いという違いもある。例えば、

- 1) 「人〜、聲あまたして、馬の音きこゆ。「何人かは、かゝるさ夜中に、雪をわくべき」と、大徳たちも、おどろき思へるに、宮、狩の御衣にいたうやつれ、濡れ〜、入り給へるなりけり。」(『源氏物語』4-467)
- 2) 「冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、」(『枕草子』43)
- 3) 「除目の頃など、内裏わたりいとをかし。雪の降り、いみじうこほりたるに、申文もてありく。」(同46)

上記1)〜3)では、雪の描写に違いがある。1)では読み手を雪の場面の中に引き入れて表現しているのに対し、2)と3)では作者が客観的な視点で描写しており、作品の中に読み手を引き込むことはしていない。このような視点の違いに加え、クオリアには「時代」「地域」「使用語彙」「修辞法」など、さまざまな小変数が込められている。これらの変数を用例ごとに繰返す煩雑さを避けるため「S1 質的変数「P 作者の視点」+「Q 作品形式」」をS1、「S2 質的変数「T1 時代変数」+「T2 地域変数」」をS2、「S3 質的変数をS3、S4 質的変数をS4、S5 質的変数をS5」と略記すると、各用例は「S1+S2+S3+S4+S5」と表記できるが、クオリアに強く関与するのはS3〜S6であり、「S1+S2」は中立的である。この規準で用例を整理していくと、1)は「S3「視覚」[-1]」+「S4なし」+「S5「深く積もる」[-1]」、による[-2]と記述きる。2)は「S3「視覚」[+1]」+「S4「いふべきにもあらず」[+3]」+「S5「薄く積もる」[+1]」、による計[+5]となる。3)では「S3「視覚」[+1]」+「触覚」[+1]」+「S4なし[+0]」+「S5「薄く積もる」[+1]」、による計[+3]となる。

まずクオリアの表現形態の違いから見ていくことにする。



図1 クオリアの基本形-1

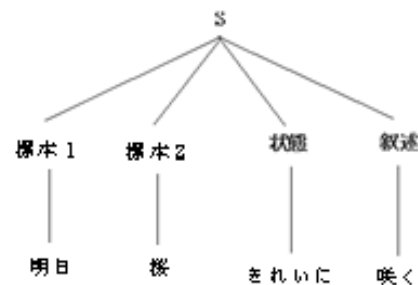


図2 クオリアの基本形-2

図1は典型的なクオリアの基本形である。「標本」とはクオリアの表現対象となるカテゴリーであり、構文上の「主語」として位置づけられる成分である。「程度」と「状態」は

クオリアの具体的な評価づけに関与してくる成分であり、「時」成分や「場所」成分などいろいろな成分を伴う構文構造になることもある。

図2は「～は～がどうだ」という双主型の構文（松下文法で説く双主文）であり、これを基本形-2と想定する（厳密には「標本1」と「標本2」は別レベルの構文位置に表示すべきであるが、煩瑣を避けるため簡易的な表示にとどめた）。

基本形の全ての枝に「語彙」が挿入されるとは限らない。図3では「標本」と「叙述」にのみ語彙が位置する構文である。この「標本」と「叙述」の組み合わせが構文成立の最小単純形であり、クオリアの含有されない文はこの構文が基になる。図4は語彙に修辞法が加えられた場合の構文である。さらに、図5は生成文法や格文法を踏まえた構文成分を配置した暫定的な構造とする（意味構造から構文構造への変換規則の記述は省略する）。

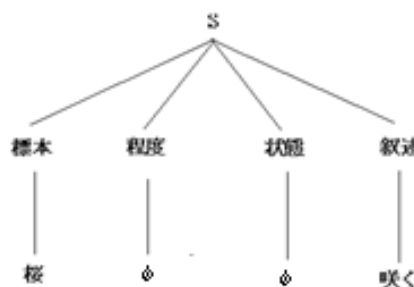


図3 語彙変数



図4 修辞法変数

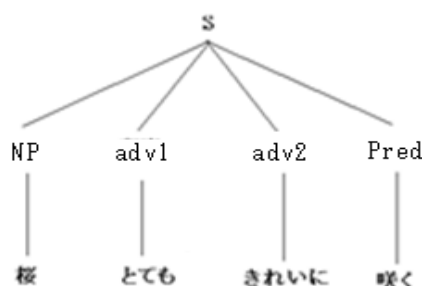


図5 文法変数

3 調査の方法-1

本研究では、文字表現におけるクオリアの質的変数は次の変数で構成されと予測している（「R 比較度」「T 広域変数」は量的変数に関与する）。

質的変数→S1 質的表現+S2 質的表現+S3 質的表現+S4 質的表現

S1 質的変数→P 表現目的と視点+Q 作品形式

P 作者の視点→±歴史的記述±場面に入り込む±写實的

Q 作品形式→±記録±歌集±物語±随筆±連歌±俳句

S2 質的変数→T 広域変数

T 広域変数→時代変数+地域変数

S3 質的変数→U 感覚的変数

U 感覚的変数→視覚±聴覚±嗅覚±味覚±触覚

S4 質的変数→V 情感的変数

V 變動的変数→照応±対比±強め 1±強め 2±擬人法±比喩±係結び±掛詞±縁語±倒置法±歌枕

W 情感的変数→をかし±あはれ±風雅±高德感±高潔感±若し±美し±華やぎ±賑わい±あたたかし±清閑±清涼±幸福感±懐旧±待望±風情±風狂±滑稽±浮かれ±幻想±不安±嘆き±^{はかな}儚し±孤独±悲し±憂ふ±悼む±淋し±あわただし±荒れどふま±消えがてに±少し積もる±高く積もる±うち散る±程降る±悼む±濡れる±厳密±嫌悪…

これに対し、量的変数として次の各項を想定している（今後の調査データが増えていくことで、新たに小変数が増加することも予想される）。

量的変数→S5 語彙変数+S6 文法的変数±S7 修辭的変数+（R 比較度）

S5 語彙変数→±間投詞語彙±強い程度副詞語彙±軽い副詞語彙±状態語彙±叙述語彙

S6 文法的変数→±係り結び±倒置±強調の助詞±詠嘆の助詞

S7 修辭的変数→W 修辭的変数

W 修辭的変数→±照応±錯綜転倒±擬人法±比喩±掛詞±縁語±押韻±歌枕

比較度は S1～S4 に関与する。具体的には感動詞は [+2] ± [-2]、軽度の程度副詞なら [+1] ± [-1]、強度の強め副詞は [+2] ± [-2]、係り結びは [+2] ± [-2]、強調の文末詞は [+1] ± [-1]、などとするが、問題点も残る。次節で扱う。

4 調査方法-2

比較度³⁾の扱いは本研究の中でもきわめて重要な位置を占める。調査が進行中なので最終的な規準の決定は将来に譲るしかないが、『古事記』『万葉集』『源氏物語』『枕草子』を調査し終えた現時点で、次のような比較度を得ている（『雪月花のクオリア』では日本文学大系本の原文表記通りに記載したが、本稿では現代の漢字表記とした）。

[+0] = 対象を表現する一文の中に評価・の表現形式が何も存在しない段階。評価は中立。

[+1] = 対象を表現するひとまとまりの文中に、読み手の認知にプラス評価・質感を誘う表現形式が一つだけ存在する段階。例えば「をかし」「あはれなり」、詠嘆の助詞「も」などが単独に存在する場合。φ形式、つまり具体的な言語表現形式が表出されない（文脈で読み手が読み取れる表現形式は潜在化する）いことが少くない。

[+2] = 対象を表現する一文中にプラス評価・感情の表現形式が二つ存在するか、[+1] 段

階の対象より高い評価・感情性を明示する表現形式が存在する場合。例えば「いとをかし」「～こそをかしけれ」、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などに使われる強い感動の「あなに」など。

[+3]＝対象を表現する一文中にプラス評価・感情の表現形式が三つ存在する（例えば「いとこそをかしけれ」とか、[+2] 段階の対象より高い評価・感情性を明示する表現形式（「言うべきにもあらず」「格別である」「あらまほし」（あつてほしい、理想的だ）など）がある場合。

[+4]＝対象を表現する一文中にプラス評価・感情の表現形式が四つ存在するか、[+3] 段階の対象より高い評価・感情性を明示する表現形式が存在する場合。『万葉集』2116「白露に争ひかねて咲ける萩散らば惜しけむ雨な降りそね」（『万葉集』3-p.109）の「萩」は、「咲ける」＋「散らば惜しけむ」＋「雨な降りそ」＋あつらえ願う「ね」による[+4]とした。

[+5]＝プラス評価・感情の程度が[+4]よりも高いことを明確に示す表現式が存在する場合。「2327誰が園の梅にかありけむ幾許も咲きにけるかも見が欲しまでに」（『万葉集』3-p.147）の「梅」は、「幾許」（たくさん、はなはだしく）＋「咲きにける」＋「かも」＋「見が欲しまでに」＋倒置法による[+5]と扱った。

[+6]＝「4278 あしひきの山下日蔭覆ける上にやさらに梅を賞はむ」（『万葉集』4-p.383）の「梅」は、「あしひきの」＋「日蔭覆ける」＋「の上に」＋反語「や」＋「さらに」＋「賞はむ」による[+6]と見た。

[+7]＝例えば「たけだち、そゞろかに物し給ふに、太さもあひて、いと宿徳に、おもゝち・あゆまひ、大臣といはむに、足らひ給へり。葡萄染の御指貫、櫻の下襲、いと長う尻ひきて、ゆる――とことさらびたる御もてなし、「あな、きら――し」と見え給へるに」（『源氏物語』3-p.79）のような場合。

[+8]＝「世になし」の類いで表現されるケース。

[+9]＝「世にたぐひなし」＋「かな」などの類い。「前栽の、色――穏れたるを、蔬ぎがてに、やすらひ給へるさま、げにたぐひなし」（『源氏物語』(1-p.132)における前栽の花（花はφ形式）、源氏が躊躇する様子は、「げに」（いかにも）＋「たぐひなし」による[+9]と解した。

[+10]＝「花やかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひ給へるさま・匂ひ、似る物なく、めでたし。」（『源氏物語』1-p.370）での源氏のお姿の美しさは、「匂ひ」の[+1]＋「似る物なし」の[+8]＋「めでたし」[+1]による[+10]である。

[+11]＝「春の上の御心ざしに、佛に花たてまつらせたまふ。鳥・蝶に徹束きわけたる童べ八人、かたちなど殊に調へさせ給ひて、鳥には、銀の花瓶に櫻をさし、てふは、金の瓶に山吹を。おなじき、花の房もいかめしう、世になき匂ひを、つくさせ

給へり。」(『源氏物語』2-p. 399)。この「花」は、紫の上の春のご供養のお志として仏に奉られた花である。その花は金の花瓶に飾られた桜の花と、銀の花瓶に飾られた山吹の花であるが、鳥や蝶の装束をまとった女童8人が支え持った「銀の花瓶／金の瓶」＋「花の房もいかめしう」(花房もみごとで)＋[+8]レベルの「世になき」(またとなく最高に)＋「匂ひ」(美しい)による[+11]とした。

[+12]＝「南の御前の山ぎはより漕ぎ出(で)て、お前に出づるほど、風吹きて、瓶の櫻、すこし、うち散りまがふ。いとうらゝかに晴れて、霞の間より立ち出(で)たるは、いとあはれに、なまめきてみゆ。」(『源氏物語』2-pp. 399-400)。これは文脈から見た[+11]の桜に「風吹きて…すこし、うち散りまがふ」の[+1]が加えられて[+12]になったもの。

[+13]～[+15]＝該当例はまだ出てこない。

[+16]＝『源氏物語』の「野分」に出てくる紫の上の描写がこれにあたる。「見とほしあらはなる、廂の御座にみ給へる人、ものにまぎるべくもあらず、気高く、清らに、さと匂ふ心ちして、春のあけぼのゝ霞の間より、おもしろきかば櫻の咲きみだれたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも、うつりくるやうに、愛敬は匂ひちりて、またなくめづらしき、人の御さまなり。」(『源氏物語』3-p. 46)。野分が烈しく吹いてきたので、隔ての屏風も片隅にたたみ寄せてあり、中まで露わに見通しのきく廂の間にいらっしゃる方は、「ものにまぎるべくもあらず」(何かに紛れるはずもなく)＋「気高く」＋「清らに」＋「香気がさつとあふれ出る」＋「おもしろき」による[+5]の紫の上であり、これに「かば櫻」に喩えた「春のあけぼのゝ霞の間より」＋「おもしろき」＋「咲き」＋「みだれたる」＋比喩用法による[+5]、さらには、「見たてまつるわが顔にも」(紫の上を見申し上げる夕霧の顔にも)＋「あぢきなく」(どうにもならないくらい)＋「うつりくるやうに」(匂いが顔に移ってくるかのように)＋「愛敬は匂ひちりて」(愛敬が映えこぼれ)＋「またなく」(またとない)＋「めづらしき」(すばらしい)による[+6]が加わって計[+16]になると扱った。

[+17]＝該当例はない。

[+18]＝冷泉帝への評価。「うへ、わたらせ給ふ。月のあかきに、御かたちは、いふよしなく清らにて、たゞ、かのおとゞの御けはひに、違ふところなくおはします。「かる人は、又もおはしけり」と、見たてまつり給ふ。かの御心ばへは、浅からぬも、うたて、物思ひ加はりしを、これは、などかは、さしもおぼえさせ給はん。いとなつかしげに、思ひしことの違ひにたる恨みを、の給はするに、おもて置かんかたなくぞ、おぼえ給ふや。」(『源氏物語』3-pp. 144-5)。これは、[+8]の「いふよしなく」(いいようもなく)＋「清らにて」＋「かのおとゞの御けはひに、違ふところなくおは

します」＋「かかる人は、又もおはしけり」（こんなに美しい方が源氏のほかにも
いらっしやったのか）＋「などかは」（どうして）＋「さしもおぼえさせ給はん」
（懸想するなど考えられない）＋「いと」＋「なつかしげに、思ひしことの違ひに
たる恨みを、の給はする」＋「おもて置かんかたなくぞ、おぼえ給ふ」（顔を向け
ようとしても向けようがないと思わずにはいられない）＋係り結び＋感動「や」
による[+18]と解した。

[+19]～[+22]＝該当例はまだ得られていない。

[+23]＝『源氏物語』の「若菜下」に出てくる紫の上の描写がこれにあたる。「^{むらさき}紫の
上は、^{うへは}葡萄染めにやあらむ、^{いろ}色濃き小^{うちぎ}桂、^{うすうへ}薄蘇芳の^{ほそなが}細長に、御髪^{ごし}のたまれるほど、
こちたくゆるゝかに、^{おほ}大ききなどよきほどに、やうだいあらまほしく、あたりに、
^{うへ}匂ひ^{なほ}紗ちたる心ちして、花といはゞ、^も櫻にたとへても、なほ、ものよりすぐれた
るけはひ、^と殊に物し給ふ」（『源氏物語』3-p. 346-7）。

[-1]＝対象を表現するひとまとまりの文中にマイナス評価・質感を誘う表現形式が一つ
だけ存在する段階。例えば「わろし」など。φ形式によるマイナスの評価・質
感になることも。「是を以ちて大殿^{だい}破れ^{やぶ}壊れて、悉に雨漏れども、都て^{みづ}修め^つ理る
こと勿く、」（『古事記 祝詞』p. 267）の「雨」は「漏れ」による[-1]となる。

[-2]＝「1963斯くばかり雨の降らくに霍公鳥卵の花山になほか鳴くらむ」（『萬葉集』
3-p. 81）の「雨」は、「斯くばかり」（これほど）＋「降らくに」（降るのに）によ
る[-2]。

[-3]＝「1835 今更に雪降らめやもかぎろひの燃ゆる春べとなりにしものを」（『萬葉集』
3-p. 59）の春雪は、「今更に」＋「降らめやも」＋「かぎろひの燃ゆる春べとなり
にしものを」による[-3]となる。「ものを」は詠嘆を含意。

[-4]＝「1091 とほるべく雨はな降りそ吾妹子が形見の^{ころも}服われ^{した}下に^は着り」（『萬葉集』2-
p. 205）の歌では、恋人の形見の衣を濡らす雨が、「降る」＋「な…そ」＋倒置法＋
「とほるべく」が加わって、全体で[-4]と位置づけた。

[-5]＝「786 春の雨はいや頻降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも」（『万葉集』
1-p. 319）では、梅の花そのものがマイナス評価なのではなく、春雨がたいそう
降るのに未だ咲きそうもないことがマイナスと見られ、「いまだ」＋「花…咲か
なく」＋「いと」＋「若み」＋「かも」による[-5]と扱った。

[-6]＝該当例はまだない。

[-7]＝「たゞ、^{れい}例の雨の、をやみなく降りて、風は時――吹（き）出でつゝ、日頃^{ひら}になり侍る
を、^{れい}例ならぬ事に、おどろき侍るなり。…侍らざりき。」（『源氏物語』2-p. 58）の
「例の雨」は幾日も続いている[-2]の「ひぢがさ雨」（肘笠雨）であるから、「例
の雨」の[-2]＋「たゞ」（ひたすら）＋「をやみなく」（小止みなく）＋「降る」＋

「風は時々吹(き)出でつゝ」(風が時々吹き出したまた吹き出しして) + 「例ならぬ事に、おどろき侍るなり」(尋常ならざることと気も動転している)による[-7]とした。

[-8] = 「世になし」「世にたぐひなし」「世に知らぬ心地す」「たとへむかたなし」「いふよしなし」「似る物なし」の類いが存在する段階。

[-9]～[-11] = 該当例はまだ見つからない。

[-12] = 「世に知らぬ心地す」 + 係り結び + 比喻用法 + 縁語 + 倒置法などの類い。

[-13] = 「世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて」(『源氏物語』1-309 頁)では、「私は、どうも、まだこの世で経験した事のないほどの、悲しみ惑う気持がする。懐かしい有明の月(女)の行方を、空に見失って。」(p. 309、頭注)の意であり、「月」と「空」は縁語であるから、この「月」は[-8]レベルの「世に知らぬ心地す」 + 係り結び + 女の比喻用法 + 「空」への縁語 + 「ゆくへを空にまがへて」 + 倒置法、による[-13]とした。

5 調査の方法-3

本節では『源氏物語』と『枕草子』の「雪」に焦点を当てて見ていく(複合語彙は本稿では扱わない)。『源氏物語』の用例から見ていく。

4) 「つとめて、雪の、いと、高う積りたるに、「爰、たてまつり給はん」とて、御前に参り給へる、御かたち、この頃、いみじく盛りに、清げなり。」(『源氏物語』5-234)

5) 「いと、あはれに淋しく荒れまどへるに、松の雪のみ、あたゝ(か)げに降り積める、山里の心地して物あはれなるを」(同1-258)

4)では雪が実に高く積もっている。この雪が紫式部にも清少納言にも同じ質感の雪に見えたのであろうか。4)の雪は「S3「視覚」[+1]」 + 「S4強め「いと」[+1]」 + 「S5「高く積もる」[+1]」、による「+3」。『枕草子』では「薄く積もった雪」は[+1]、「高く積もった雪」は原則[-1]以上のマイナスクオリアとなるようだ。

5)は末摘花の淋しく荒れ果てたお邸に松の雪だけがあたたかそうに降り積もっている雪。その雪は「S3「視覚」[+0]」 + 「S4「いと」[-1]」 + 「あはれ」[-1]」 + 「淋しく」[-1] + 「荒れまどへる」[-1]」 + 「S4「のみ」[+1]」 + 「あたたかげ」[+1]」 + 「山里の心地」[+1]」、による計[-1]となる。用例2)と4)を比べれば明らかなように、早朝の「高く積もった雪」ならば『源氏物語』と『枕草子』の比較度が同じになるというような単純な位置づけになっていないことが分かる。これは「ちらつく雪」でも同様である。あくまで引用された表現全体を対象にしてクオリアが読み手に伝えられていくことが分かる。

6) 「雪、たゞ、いさゝかうち散りて、道の空さへ艶なるに、」(同3-68)

7) 「道のほどとほくて、夜あけがたになりけり。月の、曇りなく澄みまさりて、薄雪す

こしふれる^{には}庭の、えならぬに」(同 2-389)

8) 「影^{かげ}すさまじきあか月々夜に、雪は、やうやう降り積む。」(同 2-389)

6) は「S3 視覚[+1]」+「S4 「たゞ」[+1] + 「いさゝか」[+1]」+「S5 「うち散りて」[+1]、による「+4」。7) の庭に降った薄雪は「S3 視覚[+1]」+「S4 「(月との) 照応」[+1] + 強め「すこし」[+1] + 強め「えならぬに」[+3]」+「S5 「少し積もる」[+1]、による「+7」。8) は 7) に続く箇所なので、雪は同じ比較度の「+7」と判断した。『源氏物語』の雪の用例の中でプラス比較度のもっとも高かったのが 7) 及び 8) であった。

紙幅の制限があるので、マイナス比較度の用例に移る。

9) 「日も暮れ、雪^{ゆき}ふりぬべき空の気色も、心^{こころ}ぼそう見ゆる夕なり。」(『源氏物語』3-135)

10) 「霜月ばかりになれば、雪^{ゆき}・霰^{あられ}がちにて、ほかには消^きゆる麯^{まが}買^かう間もあるを朝日・ゆふ日を^{ゆづ}防ぐ、蓬^{よもぎ}・葎^{むら}のかげに、ふかう^つ積りて」(同 2-151)

11) 「風、いたう吹きて、雪の降るさま、あわたゞしう、荒れまどふ。」(同 4-459~60)

12) 「いとど、憂^{うれ}ふなりつる雪、かきたれ、いみじう降りけり。」(同 1-256)

13) 「齊宮^{きみや}きえがてにふるぞ悲^{かな}しきかき暗^{くら}し我^{われ}(が)身^みそれとも思^{おも}ほえぬ世に」(同 2-128)

14) 「源^{げん}憂^うき世にはゆき消^きえなと思^{おも}ひつゝ思^{おも}ひのほかになほ程^{ほど}ふる」(同 4-197)

9) の雪は「S3 「視覚」[+1] + 「S4 なし」 + 「S5 心細し」[-1]、による「+3」。10) は「S3 「視覚」[+1]」+「S4 なし」+「S5 「ふかう積りて」[+1]」、による「+2」。11) は「S3 「視覚」[-1]」+「S4 (風との) 照応」[-1] + 「いたう」[-1] + 「S5 「あわたゞし」[1] + 「荒れまどふ」[-1]、による「-5」。

12) の雪は「S3 「視覚」[-1] + 「S4 「いとど」[-1] + 「S5 「憂ふなりつる」(心配していた) [-1] + 比喻「かきたれ」(垂れるように) [-1] + 「いみじう」[-1] + 「掛詞(降る、経る)」[-1]」+」、による「-6」である。

13) では作者は読み手を場面の中に引き込んでいる。この雪は、「S1 場面に引き込む」[-1] + 「物語」[-1] + 「S3 「視覚」[-1]」+「S4 「係結び」[-1] + 「掛詞」(降る、経る) [-1] + 倒置法[-1] + 「S5 「きえがてに」(消え難く) [-1] + 「悲し」[-1] + 「かき暗し」[-1]」、による計「-9」と扱った。

14) は、「S1 場面に引き込む」[-1] + 物語[-1] + 「S3 「視覚」[-1] + 「S4 「比喻(雪→私)」[-1] + 「係結び」[-1] + 「掛詞」(降る、経る) [-1] + 「倒置法」[-1] + 「なほ」[-1] + 「S5 「憂き世には」[-1] + 「消えなと思ひつゝ」[-1] + 「思ひのほか」(意外に、思ひのほか) [-1] + 「程降る」[-1]」、による計「-12」となる。

以上見てきたように、『源氏物語』の雪の比較度としては、「+2」、「+3」、「+4」、「+6」、「+7」及び「-5」、「-6」、「-9」、「-12」があらわれた。

一方、『枕草子』の雪はどのように描かれたのか。その一部を以下に示す。

15) 「にげなきもの 下衆^{げしやう}の家に雪の降りたる。また、月のさし入りたるもくちをし。月

のあかきに、屋形^{やがた}なき車のあひたる。また、さる車にあめ^{あめ}半^{はん}かけたる。(枕草子 93)

16) 「くちをしきもの 五^ご節・御仏名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる。」(同 148)

17) 「火使屋のうへに降りつみたるもめづら^{めづら}しうをかし。」(同 230)

18) 「深き^{ふか}沓、半靴^{はんくつ}などのはばきまで、雪のいと白^{しろ}うかかりたるこそをかしけれ。」(同 269)

19) 「雪のいと高^{たか}うはあらで、うすらかに降りたるなどは、いところをかしけれ。」(同 227)

20) 「からかさをさしたるに、風のいたう吹きて横さまに雪を吹きかくなれば、すこしかたぶけてあゆみ來るに、」(同 269)

21) 「わらふだの程なん侍る。こもり、いとかしこうまもほどののりて、わらはべも寄せはべらず。」(同 134)

22) 「除目の頃など、内裏^{うち}わたりいとをかし。雪降り、いみじうこほりたるに、申文もてありく。」(同 46)

23) 「昨日今日、物忌^{ものい}に侍りつれど、雪のいたくふり侍りつれば、おぼつかなさになん」と申し給ふ。「道もなしと思^{おも}ひつるに、いかで」とぞ御いらへある。」(同 231)

24) 「今朝はさしも見えざりつる空^{そら}の、いと暗^くうかき曇りて、雪のかきくらし降るに、いと心ぼそく見出すほどもなく、白^{しろ}うつもりて、なほいみじう降るに、隨身^{ずいじん}めきてほそやかなる男^{おとこ}の、かささして、そばのかたなる塀^{へい}の戸より入りて、爰^{こゝ}をさし入れたるこそをかしけれ。」(同 308)

25) 「「はやくうせ侍りにけり」といふに、いとあさましく、をかしうよみ出でて、人にも語り傳へさせんとうめき誦^{よみ}じつる歌も、あさましかひなくなりぬ。…「いかにして…夜の雨に消えぬらんこと」といひくんずれば」(同 134)

15) 「薄く降る雪」は『枕草子』のなかでは [+1] になるのが普通であるが、それが「下衆の家」に積もつては情趣も台無しであり、作者は「下衆の家に雪の降りたる」を「にげなきもの」と位置づけた。質的変数は「S3「視覚」[-1] + 「S4「(月との) 照応」[-1] + 「S5「にげなし」[-1]、による [-3] である。16) の雪は「くちをしき」雨との照応によるものであり、雨なら「S3「視覚」[-1] + 「S4「(雪との) 照応」[-1] + 「S5「くちをし」[-1]、による [-3] となるところだが、その裏の表現として薄雪が降るなら、「S3「視覚」[+1] + 「S4「(雨との) 照応」[+1] + 「S5「をかし (か何かの表現)」[+1]、による [+3]。

17) の「火焼屋」に少し積もった雪は、「S3「視覚」[+1] + 「S4 なし」 + 「S5「めづらし」[+1] + 「をかし」[+1]、による [+3]。18) は「S3「視覚」[+1] + 「S4 なし」[+0] + 「S5「をかし」[+1]」、による [+2] である。

19) は「S3「視覚」[+1] + 「S4「いと」[+1] + 「係結び」[+1] + 「S5「をかし」[+1] + 「薄く積もる」[+1]」、による [+5] である。20) 強い風で横さまに吹きかかる雪は「S3「視覚」[+1] + S4「(風との) 照応」[+1] + 「S5 なし」、による [+2] の雪。21) の消える寸前の雪の山は「S3「視覚」[+1] + 「S4 係結び」[+1] + 「S5 なし」、による [+2] の雪。

22) の雪は「S3「視覚」[+1]」+「S4なし」+「S5「薄く積もる」[+1]」、による[+2]の雪。23) と24)は写実性が希薄なので敢えて[+0]扱いとした。23) は「S3「視覚」[-1]」+「S4「いたく」[-1]」+「係結び」[-1]」+「S5「高く積もる」[-1]」+「激し」[-1]」+「おぼつかなし」[-1]」、による[-6]の雪。24)は「S3「視覚」[-1]」+「S4「いと」[-1]」+「いみじう」[-1]」+「かきくらし」[-1]」+「比喩」[-1]」+「S5「暗し」[-1]」+「激し」[-1]」+「高く積もる」[-1]」、による[-8]の雪。25) は「S3「視覚」[-1]」+「S4「はやく」[-1]」+「S5「うせ侍りにけり」[-1]」、による[-3]か。

本稿で扱ってきた『枕草子』雪の質的変数の中で、もっとも重要だったのはS4 質的変数とS5 質的変数であり、S4 質的変数には「(月や雨との) 照応」、「強め」、「係結び」の各小変数、S5 質的変数には「をかし」、「めづらし」、「覚束なし」、「くちおし」、「暗し」、「激し」、「薄く積もる」、「高く積もる」、「失せる」といった小変数があらわれた。

まとめると、『枕草子』の雪の比較度としてあらわれたのは[+2]、[+3]、[+5]及び[-3]、[-6]、[-8]であった。

本稿で紹介した『源氏物語』の雪のクオリアを数量化したものを表1と表2に、『枕草子』の雪のそれを表3、表4に示す(△はマイナスの比較度であることを示す)。

5 質的変数の数量化

表1の「S3 質的変数」や「S4 質的変数」あるいは「S5 質的変数」に関しては、クオリアの感じ方や程度は個人個人で少なからぬ差異が生まれるので、当然のことながら小変数については結果が違ってくる。その点が第2節で扱った「量的変数」と根本的に異なるところである。

本稿では「雨」のクオリアについて触れる余裕がなくなったが、調査した範囲では、清

表1 『源氏物語』雪のクオリア (一部)

『源氏物語』	S1質的変数			S2質的変数		S3質的変数					S4質的変数					
	P作者の視点		q 作品形式	T広域変数		U感覚的変数					V情感的変数					
	雪															
質的変数	場面に引込む	写実的	物語	時代変数	地域変数	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚	照応	強め1+	強め2+	強め1-	強め2-	比喩
△2深く積もった雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
3冬朝高く積もった雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
△1松に積もった雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1
3うち散る雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0
7明け方積もった薄雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
7曉に降り積む雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
4降出しそうな雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
2霜月に深く積もった雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
△4風強く降る雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
△6深く積もった雪	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
△9かき暗し降る雪	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
△12なお激しく降る雪	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0

表2 『源氏物語』雪のクオリア（一部）

『源氏物語』 雪	S4質的変数			S5質的変数												
	V変動的変数			W情感の変数												
	質的変数	係結び	掛詞	倒置法	あはれ	あたたかげ	うち散る	粗降る	心細し	あわたざし	荒れまどふ	消えがてに	少し積もる	高く積もる	悲し	憂ふ
△2深く積もった雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
3冬期高く積もった雪	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
△1松に積もった雪	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3うち散る雪	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7明け方積もった薄雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
7晩に降り積む雪	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
4降出しそうな雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2霜月に深く積もった雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
△4風強く降る雪	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
△6深く積もった雪	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
△9かき暗し降る雪	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
△12なお激しく降る雪	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

表3 『枕草子』雪のクオリア（一部）

『枕草子』 雪					S2質的変数		S3質的変数					S4質的表現					
	P作者の視点				T広域変数		U感覚的変数					V情感の変数					
	質的変数	場面に入込む	写実的	物語	随筆	時代変数	地域変数	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚	照応	強め1-	強め2-	対比法	擬人法
5冬の早朝の薄雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
3除目の頃の薄雪		0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
△3下衆の家の積雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
3五節の頃の降雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
3火便屋の積雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2はばき迄かかる雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5薄く降る雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
3風で吹きかかる雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
2消える寸前の雪の山		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2除目の頃に降る薄雪		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
△6物忌みに激しく降る雪		1	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0
△8暗く激しく降る雪		1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0
△3雨で消えた雪の山		0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0

表4 『枕草子』雪のクオリア（一部）

『枕草子』 雪	S4質的表現				S5質的変数											
	V情感的変数				W情感的変数											
	質的変数	比喩	係結び	掛詞	縁語	をかし	あはれ	めづらし	吹きかかる	薄く積もる	高く積もる	覚束なし	くちをし	暗し	激し	失せる
5冬の早期の薄雪		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
3除目の頃の薄雪		0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
△3下衆の家の積雪		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
3五節の頃の降雪		0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3火便屋の積雪		0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2はばき迄かかる雪		0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5薄く降る雪		0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
3風で吹きかかる雪		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
2消える寸前の雪の山		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2除目の頃に降る薄雪		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
△6物忌みに激しく降る雪		0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0
△8暗く激しく降る雪		0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0
△3雨で消えた雪の山		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

少納言に比べると紫式部の方が雨を嫌っていたようだ。『枕草子』では雨に関しても描写は「写実的」であり用例の数も少ない（具体的なことや多変量解析の結果などは別の機会に触れたい）。

質的変数の記述にはまだ問題点が残るので、稿を改めて論じたい。進行しつつある中世

～近代の主要作品の調査データ及び明治～現代にいたる代表的な文学作品のデータを整理した上で、そのデータを多変量解析し、デンドログラムで表示したい。『源氏物語』と『枕草子』のデンドログラムを比較することで、二つの作品のクオリアの数量的・体系的な違いを明確に示すことができよう。

注：

1) <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%82%A2>

(2021. 2. 13 接続)

- 2) 茂木健一郎『クオリア・テクニカの世界』ネイチャーインタフェイス社(2009) pp. 24-25 から示唆を得た。氏は東京の品川駅近くにあるキヤノンの 4K テレビ（当時はこのほかに NHK と東大大学院河川研究室の 2 台のみ）の映像を見て感動し計量化の可能性を考えたようだ。私は河川先生の紹介でその映像を見に行くことができた。
- 3) クオリアの「比較度」と本文のコメントは、過去に書いた「意味の視点から見た植物語彙の形式と評価度」（『日本語学』明治書院（2006）Vol. 25 pp. 49-54）及び『雪月花のクオリア』おうふう（2019）を参考にした。

参考文献：

- (1) 『源氏物語一』（日本古典文学大系 14）～『源氏物語五』（同 18）、『枕草子 紫式部日記』（同 19）
- (2) 『雪月花のクオリア』おうふう(2020)
- (3) 茂木健一郎『クオリア・テクニカの世界』ネイチャーインタフェイス社(2009)